

## おもてなしのこころと家政学

### — 旅の宿の空間分析を例として —

Common Ground of Overlapping Between “OMOTENASHI” and Home Economics : An Approach from a Home Economics’ Perspective with Case Studies of Inns

安 田 純 子<sup>※</sup>

Junko Yasuda

Abstract : “OMOTENASHI” (hospitality) and home economics have a lot of relevance between them. In this paper, I consider about “OMOTENASHI”, especially I approach it from a home economics’ perspective, inclusive of O. F. Bollnow’s spaces analysis with case studies of inns.

キーワード (Keywords) : 旅行 (tourism) 家政学 (home economics) おもてなし (hospitality)

空間分析 (space analysis) 慰安 (refresh and heal)

### 1. はじめに

筆者は、昨年総合観光学会誌に「観光学と家政学との接点—家政学からのアプローチ」を執筆し、今年日本観光学会で「ツーリズムと家政学—おもてなしのこころ」を発表した。このように観光学と家政学の接点を見だし研究を続けている。そして、観光におけるおもてなしはボルノーの空間分析を踏まえて家政学的視座で考えると多くの点で関連性を見いだすことができると考え、この論文をまとめることにした。本稿では観光、特に旅の宿におけるおもてなし(ホスピタリティ)について考察をすすめる。

非日常の考え方には、マイナスの非日常があるだけではなく、観光によるプラスの非日常もある。観光によって毎日の生活から離れ異なった日を過ごすことで、日常を新たにし、人間生活をよりよく方向づけする。そのためには、安心・安全であることは言うまでもなく、安らぎの空間である“家”(内部空間—後に説明、筆者)的要素を要する。その雰囲気・気分を作り出すためには、きわめて家庭的な、言い換えれば家族的でフレンドリーなおもてなしのこころやホスピタリティが要となる。そして、家族いっしょの時間を過ごすことのできる場所や環境など、長期化が予想されマイナス要因が多い日常から一時的でも離れることができることがポイントとなるだろう。旅行時の宿泊先では、もてなしによって日常の家庭を離れた場所で家庭的な雰囲気がつくられ、それが癒しとなることが多々ある。では、家庭的な雰囲気とはどのようなことか。家庭的な雰囲気が癒しとなる理由の一つは、家政学におけるO.F.ボルノー<sup>1)</sup>が提唱し関

※ 生活科学科

口富左氏<sup>2)</sup>が家政学の柱の一つとして考えた空間分析によって導き出せるだろう。

## 2. おもてなしについて

まずはおもてなしについてみておきたい。

もてなしとは、大辞泉によれば、1 客への対応のしかた。待遇。2 食事や茶菓のごちそう。饗応。3 身に備わったものごし。身のこなし。4 とりはからい。処置。取り扱い。と記載されている。おもてなしとは「もてなし」に「お」をつけて丁寧にした言い方で、広辞苑では、旅行者や客を親切にもてなすこと。歓待・厚遇。と記載され、その語源は、とりなし、つくろい、たしなみ、ふるまい、挙動、態度、待遇、馳走、饗応とある。

客を歓待するという意味のラテン語ホスぺス(hospes)を語源にもつホスピタリティ(hospitality)は、経済的利益や報酬(みかえり)を度外視した行為であり、自発的・非営利的・非作爲的性格が挙げられる。そのためおもてなしはホスピタリティ(hospitality)の訳とされることもあるが、まったく同じというわけではない。ヒエラルキー型で説明しているものも多く、それによると、おもてなしは相手に対する心づかいという点でホスピタリティの上位(最上位)とされることが多い。また、茶の湯から始まったと言われ、客や大切な人への気遣いや心配りという日本の文化・精神であり、表裏のないこころで客を迎えることとされている。

これまでおもてなしとホスピタリティの見解についての考察や、おもてなし文化などに関する論文はいくつか書かれているが、家政学の視座からのものは見当たらなかった。

## 3. “おもてなしのこころ”と“家”の持つ意味

人間がよりよく生きていくための根源の一つとして、労働や休息は重要なファクターとなり得る。その労働のためには、労働力の再生産のための休息とその原動力となる動機づけが必要である。ここでは“家”のもつ意味が考えられ、それは同時に旅行、特に“慰安のための旅行”の意味付けともなるだろう。

旅をするということは、非日常において外の世界(ボルノーのいう外部空間―後に述べる)に出ていることである。その中で人は、家庭的な雰囲気(内部空間―後に述べる―のような安らぎ)を求める。このためには、“おもてなしのこころ”は重要な働きをしていると考える。

旅の宿における“おもてなしのこころ”には、その根底に“家”の持つ意味を考える家政学の考え方が関与していると思える。つまり、非日常的な旅行における宿泊施設では、場所は異なっているけれども家庭生活において感じるのと同様の癒しと安らぎの空間であることが求められるからである。

旅行、特に慰安を目的にした旅では、ホスト側のおもてなし(近いことばはホスピタリティ)が期待される。そして旅人(ゲスト)は人と人とのふれ合いをも期待している。ここでいうホス

ピタリティとは、思いやり、心からのおもてなし、相手の立場になって考えることを意図し、相手に対して利便性を与えるというサービスとは異なっている。そして近年、人とのつながりや人間的な観点が重要であり、“人間くささ”や人間味のあるところからの素朴なおもてなしへの価値が見直されている。物理的な意味における“家”(宿)においても精神的・抽象的な意味における“家”においても“サービス”とは異なる“おもてなしのこころ”(ホスピタリティ)が肝心となるだろう。

#### 4. 安らいでいることと“おもてなしのこころ”

ボルノーは、人間は「安らいだ気持ち」という「内面的状態」が、「実存的絶望のあらゆる試練をこえて現在人間を囲んでいる世界にたいするのと同様に、未来にたいしても敬虔な信頼を維持する状態をさす」<sup>3)</sup>といい、「人間は絶対的な被護性の感情のなかで安らいでいるのである」<sup>4)</sup>という。また、「守護されていることを感じて、目ざめている注意力を放棄することができる…安らいで寝入ることができる」<sup>5)</sup>そして「人間は、内部世界(=内部空間(筆者))の威嚇がまったく破壊的に迫ってきはいないことを、確信しているときには、安らいでいる」<sup>6)</sup>という。旅先で受ける“おもてなしのこころ”は、料金というサービスの対価は別とした経済的利益や報酬(みかえり)を度外視した行為であり、自発的・非営利的・非作為的性格を持っている。その意味で人は安らぎを感じることができるのである。

#### 5. 「住む」ことと“おもてなしのこころ”

哲学に通じる家政学的視座において、人間は、その場所、“家”を空間的に占領し、時間的に過ごすことによって、安全な安らぎを感じ、秩序を身に着け、事物への愛情を見だし、幸福を感じる時、よりよく生きながら人間として自己の本質を満たしうる。ボルノーが「一つのたいなる真理(真実)」として挙げている「人間とは住まう者である」ということは、住むことが人間の本質であるとする人間規定を根拠としてあげ、人間は、ただそこに“いる”のではなく、“住む”存在であるという人間存在の規定を説いている。そして“住むこと”の意味は、護(守)られ護(守)る場所(家)における人間の真の存在、すなわち愛情と秩序という本質的価値をもって成長し、充足感(幸福感)に至る人間らしい存在となることと熟思する。空間と時間は人間の存在と密接な関わりを持っているが、旅行においては非日常的な空間と時間を過ごすことによって、人間は“住む”存在となりうる。その場所に愛情(家政というアガペー的な愛)と秩序をもった思いやりや相手の気持ちになって考える行い、つまり心からの“もてなし”が注ぎ込まれるとき、その空間は家庭生活において感じるのと同様の癒しと安らぎの空間になるのである。

## 6. “住む”ことと住まうものとして、そして旅することの一つの意義

哲学に近づく家政学的視点での“住む”ことは、家の中にということだけの概念ではなく、時空を越え、一定の場所に属して存在することである。“家”は存在の中心であり、混沌とした威力にたいして、人間を保護し、安らいだ気持ちを提供する。つまり、人間が根づくために城砦のごとく外部の混沌、あらゆる敵対する力から人間を護る。自然的に腐朽させる力だけではなく、現代社会の構造において徐々に加速化する破壊力をも象徴する“外部”において、人間が自己の本質を失い、そのために安らぎに達することができないという困難さにたいして、人間は“家”を求め、“住むこと”を求める。ある意味で旅人は“家”を求めている。そのとき旅人は「泊まる」よりも行って帰ってくる「住む」がふさわしい。宿主が「おかえりなさいませ」と客を迎え、「いってらっしゃいませ」と客を見送ることは、“おもてなし”の一つの表れだろう。

“家”は、単に物理的存在、すなわち家屋としての“家”としてだけではなく、確固とした立場を与えることをも意味し、砂漠のようになったところに“おもてなし”は、水のように滲みていく。つまり、“家(家庭的な雰囲気)”と“おもてなしのこころ(ホスピタリティ)”—家政と旅は深い根底的なところで関係性を持っていると熟思する。

サービスとは違い、“おもてなしのこころ(ホスピタリティ)”は、人間の愛情(アガペ的な愛)と秩序から発し、またそれは感謝という形で相互関係として通じるものとする。このことは、非日常の中に日常の安らぎを求める旅、特に“リフレッシュのための旅行”や家族(との絆再確認)旅行では、ホスト側においてもゲスト側においても重要なファクターの一つとなるだろう。

## 7. 家政学における“家”の持つ意味と旅との関わり

### 7. 1 “家”の持つ意味

現代社会は、人間のすべてを営為、無秩序、散逸、崩壊へと導くあらゆる力を持っている。それは、D.リースマンが著した『孤独な群衆』において現代人の孤独と不安について言及したことを思い起こさせる。このような実存的思想漂う世界において、人間はいかに安らぎや希望に向かって指向するか、護られた空間“家”に“住まう”(生活する)ことによって人間の生の健全さは保たれる。ここに家政学における“家”の持つ意味を見いだすことができる。

ボルノーは「健全なもの」ということばを使って人間をみる。「健全であること」「健全なままであること」「健全になること」ということばを使って、「どんな傷害を受けても、再び健全である状態に戻ろうと努力する、何ものか」<sup>7)</sup>と人間を含む有機体を考える。そして、碎かれる可能性があるから「健全な」ということが可能で、「健全な世界のなかで自己を保持する」課題が生じ、二重の方向を指しているという。それは、「脅かしに対抗するところの、安らいだ気持ちを完成すること」<sup>8)</sup>と、「人間が自分の側で、力の及ぶかぎり自分を脅かす危険にたいして武装することを、要求する。」<sup>9)</sup>つづけて、「人間がこの世界のなかで一つの安全な避難所を創るよ

うに努め、人間に迫ってくる危険にたいして、自ら防壁を築くことによって、しゅったいするのである」<sup>10)</sup>と言っている。

## 7. 2 旅との関わり

関口氏が家政学に哲学を求める際にあたったサン＝テグジュペリの『城砦』<sup>11)</sup>では、比喩的な表現で城砦(じょうさい)＝“家”を描写している。筆者は影山彌氏<sup>12)</sup>のご指導で精読したが、ここでは、外部世界(＝外部空間(筆者))の威嚇(混沌)から人間を護っていると同時に、「〈安らいでいること〉や希望などの徳についての、これまでの考慮の際に、人間が実存的動揺(不安や絶望－筆者)を超越して自分自身のなかに新しい確固とした点を築く」。<sup>13)</sup>旅する意味とそこに要する“家”＝もてなしと安心できる施設などの要素は、まさにこれを示唆するものと考えられる。

## 8. ボルノーの空間分析から

“おもてなしのこころ”とも密接に関係している癒しと安らぎの空間について考察するにあたり、前出の関口氏が「家政学とは何か」という問いに対してよりどころとした、O.E.ボルノーの空間分析についてみておきたい。関口氏は、家政学に実存的視点を取り入れ「家政学とは何か」の問いに対して、ボルノーの「人間とその家」<sup>14)</sup>にそのよりどころを求めた。

ドイツの哲学者・教育学者であるボルノーは、人間によって体験される空間には、根本的区分、すなわち「内部空間」と「外部空間」の区別が生ずるという。そして、「内部空間は人間がそこへ帰り、その中で自分が安全だと感ずることのできる休息と平和の空間である。つまり、守護の空間である。外部空間は労働と仕事の空間で、敵意に満ちた緊張の空間である。人間生活の健全さは、まさにこの2つ領域の均衡が正しくたもたれていることにかかっている」<sup>15)</sup>と明言している。これについて関口氏は「人間存在の個人的意義と社会的意義の基盤を明確に表現しているとみていいのではないか」<sup>16)</sup>と述べている。

そしてボルノーは、内部空間にあたる“家”について、「家の私的空間を保持することは、人間の精神の健全さのために、欠かせない条件である。人間は家の中で、ただ肉体的に休養することができるだけでなく、世界(つまり外部世界－筆者)の忙しい仕事の中で精根が尽きていく時に、英気を養って再び仕事に出かけるために、再び内面的に自分自身を取り戻すことができるのである」<sup>17)</sup>と言っている。ここにおける“家”には単に場所的意味だけではなく、人間学的意味も含まれている。また、「人間自身は家の内部にいるか、外部にいるかで異なったものになること、ただ違った態度をとるということだけではなく、別の全く異なった意識構造をもつようになるということを注意しなければならない」<sup>18)</sup>としている。また、ボルノーは次のようにも述べている。「人間は偉大な使命を果たし、偉大な行為を行うために、家を出て、敵対的な生活の中へ出ていかねばならない。・・・この使命を果たすためには、人間は対極として、その中に帰り、再びそこから出ていくような、自分を保護してくれる世界を必要とする。」<sup>19)</sup>こ

れらは、物理的な意味でも精神的な意味でも、人間の生活には、内部(家)と外部が不可欠で、人間らしい生き方を展開するには、均衡がとれていることがその必要条件であることを示している。ボルノーが分析している“空間”とは物体が関係している広がり・場所としての“空間”だけではなく、“時間”との関わりも含む認識の形式でもある。また、具体的な場所の広がりだけではなく、人間存在のあり方を示している。

ボルノーの2つの空間分析から考えると、近年程度の大小はあれ、この均衡が崩れているのではないだろうか。つまり、外部空間といわれる緊張の空間の割合が内部空間といわれる休息と平和の空間より大きくなっていると考えられる。この“家”(内部)の存在が脅かされている。そして、具体的な意味での“家”はもとより抽象的な意味での“家”の存在までもが脅かされている。

## 9. 「内部空間」=守護空間(安らぎの空間)⇒旅の宿(宿泊施設)

8で扱ったボルノーの空間分析から、旅行における宿(宿泊施設)は、「内部空間」に相当し、その守護空間における休息と平和の要素は“おもてなしのこころ”であり、その役割の一つはこの安らぎの空間を充実させることと考える。関口氏は、内部空間は「身体的、精神的休養の空間として必要であり、外部空間にたち向かう新たな鋭気を養成し、また自己自身にたちかえる空間である」とボルノーがいつていると記した<sup>20)</sup>。旅行自体は“家”の外である「外部空間」にいるわけであるが、そこにおいても宿(宿泊施設)は守護の空間であり、“家”つまり「内部空間」に相当する。ここに現代社会における家政学の新たな根拠といわれる“家”の持つ意味を理解することの大切さを感じる。

アットホームという言葉がある。その使い方をみると人間(生活)にとって家庭的な雰囲気がいかに大事であるかがうかがわれる。旅館などで到着の際に「おかえりなさいませ」、出発の際に「いってらっしゃいませ」という声かけをしているのを耳にすることがあるのは、外部空間においても内部空間(家)にいる(a'空間=内部二次空間)<sup>21)</sup>ようにくつろいでほしいという“おもてなしのこころ”が関与しているからなのだろう。もちろんそこには信頼感に満たされた空間としての安全と信頼と親しみの現存が必須の要件となる。

## 10. 人間性を回復させる旅の必要性和“おもてなし”との関わり

このところ、自然災害や紛争、感染爆発などが世界的に起こり、深刻な被害が拡散しており、“不安”が広がっている。これらの現状を踏まえると、“人間性を回復させる旅行”が注目されるだろう。ここでいう人間性とは、人間が人間らしく生活するということであり人間存在の在りよう人間の生活そのものの在り方であり、関口氏のいう「人間守護」<sup>22)</sup>の理念をもって思索するものである。「人間はその家に守護されることによって人間らしくその本質を新生させ得る」というボルノーの指摘を関口氏は家政学の本質的な出発点と考えた<sup>23)</sup>。

都会の殺伐としたモノより地方や地域の自然的・家庭的なモノが求められ、自然との共存を再発見できること、人工物から離れるという意味での自然に触れること、“時間”ではなく“時”を感じるという意味での歴史的なモノに触れること、人の“生”を感じるという意味での祭りなどに触れること、家族も含め人とのつながりを感じるものが“人間性を回復させる旅行”の鍵となるにちがいない。

人との距離をおくことに藤村正之氏は不安の鎮めとしての“癒し”をあげ、癒しの多元化として、大塚英志氏の言う「癒しとしての消費」—自分自身を癒すための消費と他者を癒すための消費の2つを取り上げている<sup>24)</sup>。その消費行動が旅に向けられれば“慰安を目的とする旅行”指向や“観光ボランティア活動”に結びつくことになる。

“慰安”というからには、心にふれ安らかな気持ちになることができるだけでなく、安全と思える環境や安心できる環境が必要である。アメリカの心理学者A.マズローが、人間の欲求段階において「生理的欲求」の次に「安全の欲求」をおいている<sup>25)</sup>ように、安全であることは、旅行の前提条件である。矢口祐人氏が「観光とは、ある土地の人がよその土地を訪れる行為であり、人と人との出会いを作り出す」<sup>26)</sup>と述べているように、よその土地に行くのであるから、安全と思えることは大事である。特に慰安を目的にあげる旅行には、そこに行って武装を解除できる要因、家政学でいう“家”(内部空間)の雰囲気が多くなければならない。場所的にも食料的にもあらゆる点での配慮が必要であることは言うまでもない。

旅の動機付けにはどうしてもそこに行きたいと思わせるものや、そこでなければならないものがなければならない。リピート要因には特に人と人、人と自然のふれ合いが感じられることも大切だろう。そのためには、大勢での団体旅行というよりも家族単位が好まれ、地方や地域の自然的・家庭的なモノが求められる。たとえば民宿に泊まることや自然との共存を再発見できることなどが求められる。非日常における“家”的安らぎが求められるのである。

“慰安を目的とした旅行”、“ケアのための旅行”、“保養目的の旅行”では、“癒し”がキーワードとなり、人とのつながりを感じることができ、“命の洗濯”ができることも旅行の目的となり得る。“家族型の旅行”や、精神面においてリフレッシュできる“慰安を目的とした旅行”の現代における意味は大きく、『「楽しみを目的とする旅行」』という人間の社会的行動<sup>27)</sup>という意味だけではなく、“気晴らし”・“気分転換”という意味で“慰安を目的とした旅行”の効果は期待できる。先に挙げたように、家政学では「生活主体としての個人・家族・コミュニティから対象を眺め、愛情、ケア、互惠関係、人間的成長、文化の伝承と向上など」<sup>28)</sup>を視座に入れており、その意味で家政学の目的は、“おもてなし”や非日常の中に日常の家庭的雰囲気を求める“慰安を目的とした旅行”の在り方によりそうものであると示唆する。

しかし、サービス産業としての観光業においては、この“おもてなしのこころ(ホスピタリティ)”を“労働力商品”として提供しなければならないことは多々ある。人として個々人の内発

的な行為を売り上げと利益に貢献させるという矛盾にどう折り合いをつけるかが難しい。それは、ホストとゲストという関係において“おもてなし”もサービスに含まれるととらえ、そのサービスに対する対価として合理的に考えなければならないからである。本当の意味での環境や人に優しい社会が求められている今、サービスの提供も安売りではなく、責任をもった提供の仕方が重要視されるべきであり、もちろんその際はサービスといっても“こころ”と“気配り”をないがしろにすることは意味していない。

## 11. おわりに

本稿では、旅の宿を例として“おもてなしのこころ”と家政学について考察した。筆者は、家政学的発想から“おもてなし”に着目した。旅することは“非日常で生活する”ことであり、家政は家族を要員として“日常生活(暮らし)”のなかでの知恵と技術である。家政学は広い領域をもち、様々な角度からの思考が可能であり、生活からの発想に基づき、思考や行動において人間を中核に据えている。これまでみてきたように、“家”の空間(内部空間と外部空間)の考え方は、旅の宿にも通じるものである。ボルノーの空間分析を踏まえて家政学的視座で考えると観光におけるおもてなしは多くの点で関連性を見いだすことができる。“おもてなしのこころ”は旅する者への家族的な愛にもつながるメリットとなるだろう。この考察は、新しい試みとして日本の文化や精神に結びつき、その深い探究につながることをも期待している。

### 注)

- 1) O.E.ボルノー、チュービンゲン大学の哲学・教育学の教授、郡山女子大学における講演「人間とその家」は同大学学長関口富左氏(故同大学名誉学園長)に学問上の影響を与えた。
- 2) 関口富左、郡山女子大学学長(故郡山女子大学名誉学園長)『家政哲学』家政教育社(1977)の編著者。
- 3) O.E.ボルノー著 須田秀幸訳：実存主義克服の問題—新しい被護性、58頁、未来社、1969。
- 4) 同上
- 5) 同上
- 6) 同上、179頁。
- 7) 同上、193頁。
- 8) 同上
- 9) 同上
- 10) 同上
- 11) 『城砦』(じょうさい)について  
アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ(1900-44)といえば、『星の王子さま』の著者として有名であるが、他にもいくつかの著書を残している。『城砦』もその一つであるが、第2次世界大戦末期に飛行中失踪する直前まで手を入れていた手稿で、後に『城砦』として出版された。
- 12) 郡山女子大学名誉教授



- 13) O.F.ボルノー著：前掲書，167頁.
- 14) O.F.ボルノー著，須田秀幸訳：人間とその家，郡山女子大学紀要，Vol.3，1966.
- 15) O.F.ボルノー著：前掲書，118頁.
- 16) 同上
- 17) 関口富左編著：人間守護の家政学，118頁，家政教育社，1999.
- 18) O.F.ボルノー著：前掲書，121頁.
- 19) 同上，121頁.
- 20) 同上
- 21) 関口富左氏は、内部空間をa空間、外部空間をb空間とし、その接点を人間存在の確認として、aとbとの均衡が大事だとした。またこれらの空間を別な見方から考え、内部空間(家)は外部空間に囲まれていて、寄宿舎や病院や介護施設はb空間に飛び出たa'空間(内部二次空間)とした。同様な意味で、旅行における宿(旅館等)はa'空間といえるだろう。
- 22) 人間を守り護る意で、家政学の中心理念として、関口富左氏が措定したもの。(日本家政学会：家政学用語辞典，133頁，朝倉出版.)
- 23) 関口富左編著：前掲書，133頁.
- 24) 藤村正之：〈生〉の社会学，77-80頁，東京大学出版会，2008.
- 25) A.マズローは、人間の欲求段階を1 生理的欲求、2 安全の欲求、3 社会的欲求、4 自我欲求、5 自己実現の欲求とし、段階的に高度化すると提唱した。
- 26) 矢口祐人：ハワイの歴史と文化，166頁，中央公論新社，2009.
- 27) 前田勇・佐々木土師二監修，小口孝司編：観光の社会心理学，6頁，北大路書房，2006.
- 28) 日本家政学会 家政学原論部会編：やさしい家政学原論，146頁，建帛社，2018.

